

母間線刻画

母間線刻画は、島の最高峰・井之川岳の東斜面に散在する4つの謎めいた石彫画群です。今日まで、いつ誰がこれらを作ったのか、そして、これらが何を意味しているのかは解明されていません。この岩の絵は、線が薄くなっているものの、4つのうちで最も詳細に彫られており、一本の矢と一隻の船を思わせるような形が見とれます。ここより下方にある2つ目の岩の彫刻は、かろうじて見える状態です。3つ目は祭壇のような階段に彫られており、4つ目にはかなり複雑で他の線刻画と同様不可解なデザインが描かれています。

地元の歴史家は、この地域はかつて、土着の宗教における女性司祭であったノロの管轄地だったと考えています。この宗教では「神道（かみみち）」という山頂から海へと続く神の通る神聖な道がある信じられていました。これらの岩の周辺は、ノロが豊穡を祈願した神聖な場所だったと言われています。シャーマンと同一視されることがありますが、ノロは個人ではなく集落を守り、集落のために祈りを捧げる役割を担っていました。

ムーの伝説

線刻画に関係があるかもしれない、おそらく線刻画よりさらに古くから伝わる話があります。伝説によると、かつて、琉球全域で恐れられていた巨大なハブ（毒蛇）がこの山をすみかとし、不運な島民をむさぼり食っていました。大ハブはかすかな音でも聞きつけて這い寄ってくるため、村人たちは森で薪を集める間、完全な静寂を保たなくてはなりません。この山はやがて、おそらく森で音を立てないようにという警告の意味を込めて、「ムー（nothingness）」と呼ばれるようになりました。この伝説を知った後は、3つ目の岩が階段ではなくとぐろを巻いた大蛇に見えてくるかもしれません。